

神話のいきづくヤムナー河畔（その二）

東方学院専任研究員 及川弘美

最初に、『バガヴァット・プラーナ』第10巻22章の1〜14詩節までの訳（試訳）をご紹介します。しよう。

ヘーマンター（冬）の第一月に、ヴラジャ（ヴリンダーヴァンを含む地域一帯）地方のナンダ村の少女たちは、カーティヤーヤニー（パールヴァティー）女神を讃える誓戒の祭祀の供物を捧げていました。彼女たちは、夜明けに、カーリンデー（ヤムナー）河で沐浴をし、その水辺で、砂の女神の像を作ると、白檀の粉、花輪、ご馳走、芳香の煙漂う灯火、

新鮮な果物、穀物そして様々な供物を捧げて祭祀を行なっていました。「カーティヤーヤニー女神よ、偉大なマーヤーよ、偉大なヨーギー・ニーよ、最高女神よ、牛飼いのナンダの息子（クリシュナ）を、私の夫としてください。女神よ、あなたに帰依します」とマントラを唱えながら、かの少女たちはプージャー（礼拝の儀式）を取り行ないました。こうして、クリシュナを想つて少女たちは、一カ月間を祭祀に費やしました。また、バドラカーリー（ドウルガー）女神にも「ナンダの息子が夫になりますように」と祈りました。毎朝太陽が昇

ると、彼女たちはお互いに自分たちの腕をつないで、沐浴のためカーリンデー河へと歩きながら、声高らかにクリシュナを讃え歌ったのでした。ある時、河辺に着くといつものように衣服を岸辺に脱ぎ捨てて、クリシュナを賛歌しながら水の中で楽しく遊んでいました。するとそこに神々のなかの神、ヨーガの王、至福者クリシュナが仲間たちに取り囲まれて近付いてきました。そして彼女たちの衣服を盗んでカダンバの木の上に登って、少年たちと一緒に笑いながらからかって言いました。「少女たちはここにきて、それぞれ望みの衣服をお取りなさい。あなたがたが戒誓によって疲れきっていることが本当であるように、私は冗談ではなく本気で言っているのです。私は今まで嘘、偽りを言ったことはありません。ひとりずつでも皆一緒にでもよいですから服を

取りにいらっしやい。優美な御婦人たちよ」クリシュナを盲愛していたゴーピーたちは、クリシュナのそのことが戯れであることに気づいて、恥ずかしげに互いを見て笑みをこぼしました。しかしだれも出ていこうとはしませんでした。こうして、ゴーヴィンダ（クリシュナ）がふざけて言った時、首まで水に浸かっていた彼女たちはとまどい、水の冷たさに震えながら彼に言いました。「最愛の人よ、私たちは、あなたが牛飼いのナンダの息子で、愛する方であり、ヴラジャの人々から尊敬されていることをしっています。しかし、おお、悪ふざけはいけません。どうぞ、寒さで震えている私たちに、服を返してください。

引用が長くなつてしまいましたが、このあと物語は、ついに寒さに耐えきれなくなつて河からあがつてきたゴーピーたちが、祭式のあと服

を脱いで沐浴することの罪をクリシュナから咎められ、その罪を償うことによりクリシュナから服を返してもらおう場面へと展開していきま
す。

ところで、この物語の舞台が、現在チール・ガートと呼ばれているところです。チールとは「布切れ、ぼろ切れ、衣服」を意味し、この物語にちなんでチール・ガートと名付けられたのです。チール・ガートの巨木にはクリシュナ神が祀られ、毎日たくさんの巡礼者が訪れています。そして、女性たちは、必ずこの巨木にサリーを結びつけてお参りするので、いつも色とりどりの鮮やかなサリーが、この巨木の枝先を彩っています。それは、まるで、時空を超越した永遠の神の世界を象徴しているかのごとくです。おもしろいことに、ここから五〇メートルほど上流にも同様な光景がみられるのです。どうやらここでもチール・ガートを称して参拝者を集めて



いるようです。日本ならば「元祖チール・ガート」の旗が、どちらかにたなびくところかな、などと考えると、日本もインドもあまり変わらない様に苦笑してしまいます。しかし同時に明らかかな相違にも気づかれます。

インドでは神様や偉大な聖者に関わるところはすべて聖地として崇められ人々が集まっています。ヴリンダーヴァンやその周辺にも、神話に基づいた多数の聖地がみられ、決まった巡礼コースがあります。そしてたくさん的小銭を用意してきた巡礼団の人々が、巡礼の先々でお賽銭をあげていきます。そのような巡礼地は、様々な店が立ち並び賑わいをみせています。信仰とはいえ、神話という虚構の世界にこれほどの情熱を注ぐインド人、それは、日本人が過去に思いを馳せ、いたるところに史蹟や資料館を作るのに似ています。私たちは、過去の歴史という存在の絶対性を疑いません。しかしインドでは、

それと全く同じことが神の世界でいえるのです。彼らは神話の世界を事実としてその存在を認め、現実の世界にオーヴァラップさせるのです。それは原始的であるとか、そうでないとかいうことではすまずことのできない、価値観の全く異なる世界観を作り上げているといえるでしょう。次回はこの点についてももう少し考えてみたいと思います。

